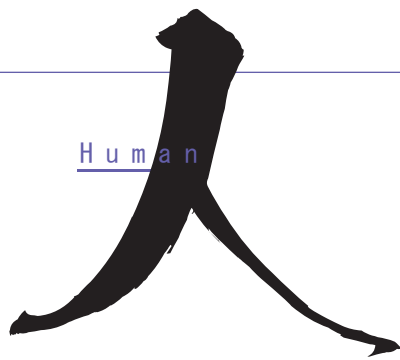




北から南へ異動して

研究推進部長

佐藤 尚（さとう ひさし）

北海道出身です

生まれは札幌で、大学卒業まで北海道で過ごしました。生物に興味があったことから、農学部を志望しました。卒業後は農業研究機関を希望して国と北海道の採用試験を受け、幅広いエリアを対象とする国の研究職に就くことができました。しかし最初の配属先は北海道となり、それから農研機構が独法化した2001年に長野県の試験場に出向となるまで、北海道に35年おりました。北海道を出たあとは長野、東京、那須、そしてまた北海道と勤務しましたが、途中技術会議勤務の2年間を除き、ずっと飼料用トウモロコシの育種に携わってきました。北海道の道東地域は低温で飼料用トウモロコシの栽培が難しい酪農専業地帯ですが、そこでも安定して栽培できる極早生品種の育成に貢献したのが一番の成果と思っています。研究対象を変更することなく仕事を続けてこられたことは幸せであったなど感じる反面、別の作物などを対象としていたらどうなっていたのかなど考えることもときどきあります。

九州に来て

2022年4月に農研機構九沖研の合志に異動となりました。九州の印象は、最高気温自体は関東とそれほど違いはないのですが、とにかくいつまでも暑いということと、冬はほんの一瞬だけ関東と同程度の冬があるという感覚です。このような気候を活かして一年中何らかの作物が圃場で生産されており、知識として持っていた飼料用トウモロコシの二期作をいざ目の前にすると同じ日本といっても違いの大きさを実感します。九沖研について



の感想は合志、筑後、久留米、都城、種子島、糸満、口之津と多くの研究拠点等があり、適地に研究拠点があるというのは利点である反面、全体把握をするのは難しいなとつくづく感じます。

これからの九沖研

温暖多雨な九州・沖縄地域は、水田では二毛作、サツマイモなどの畑作、肉用牛を中心とした畜産、サトウキビや茶などの工芸作物、イチゴ、野菜や果樹などの園芸が盛んで、全国の農業生産額の2割を占める食料供給基地であり、イチゴ、和牛肉、サツマイモなどは輸出を大きく伸ばしています。このように多様な農業が展開されている九州・沖縄地域を対象に九沖研は第5期中長期計画では「農地フル活用による暖地農畜産物の生産性向上と輸出拡大」に向けた研究に取り組んでいます。また、第6期に向けて新たな研究課題に取り組んでいくことになります。皆様の意見も聞きながら九沖研の研究が円滑に推進するように取り組めますので、よろしくお願いいたします。



▲北海道十勝管内でトウモロコシ品種「たちぴりか」をイアコンサイレージ用に収穫している風景